

「ACTFL 準拠の OPIc サービス提供」を通して 大会テーマを考える

八木 智裕 A

1 はじめに

当法人は、グローバル人材育成教育学会の設立当初より、英語学習における課題を解決する一環として、ACTFL¹⁾準拠のコミュニケーション能力測定テスト「OPIc」の提供に取り組んでまいりました。その結果や改善に向けた取り組みについて、継続的に紹介してきた経緯があります。

第12回全国大会では、「グローバル人材育成の対象と学び方を広げよう」²⁾というテーマのもと、過去約10年にわたる活動成果を整理し、今後の方向性について提言を行いました。

今回の発表では、大会テーマ「Beyond English」の視点から、これまでの英語中心のアプローチを超え、より多言語・多文化的な人材育成の可能性を議論することを目的としていますので、全国大会の提言に至った具体的実態紹介を通して、参加者の皆様とともに、これからのグローバル人材育成のあり方について思索を深めたいと考えます。

2. 第12回全国大会発表要点

コロナで学習環境が変わるのに加え、国際状況が大きく変化する中、グローバル人材育成の対象と学び方を広げる活動を支援したい旨を表明しました。その中で、まずは以下4つの方向性を考えたり、促すことを中心に活動を継続したいと発信させて頂きました。

- ① 高校以降英語学習を継続する路線を留学等を明確に目指すタイプと観光産業等就労先で活用する実務タイプに多様化すると共に利用目的化し、必要とされる到達レベルの目安検証を推進する。
- ② 生成AIを利活用した学習は新たな挑戦であり、無暗に信頼し、頼ることのないような学び方を指導者と一緒になって研鑽する。
- ③ 日本で就労・学習する外国人もグローバル人材である。その日本語教育が文部科学省で制度化

・資格化推進される動きを加速化・充実化する日本語指導人材育成を支援する。

- ④ 高校以降の外国語教育においては地政学的近隣諸国や、世界における当該言語利用人口、自身の将来キャリア（スポーツ・音楽）のルーツ・指導者を意識した言語選択学習の機会を供与し、「つながり」の深さを学ぶきっかけとなる外国語学習を支援する。

3. 4つの提言の背景となる「ACTFL 準拠の OPIc サービス提供」結果について

令和6年12月25日開催された中央教育審議会（第140回）への諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について：外国語教育について、小学校高学年の外国語科を導入する等、小学校から高等学校まで大幅に充実がなされた中、生成AIの活用を含め、今後の在り方をどのように考えるか。また、手軽に質の高い翻訳も可能となる中、外国語を学ぶ意義をどのように考えるか。」³⁾に対する進展も興味深く、活動に取り入れたい。

ただ方向性として少子化が進む中において現在の学習者や大学進学者数を維持することは困難であり、外国人労働者・学習者を取り入れた学習空間への移行無くしては運営が難しいと考えます。諮問資料p98にある高校卒業時CEFR A2 レベル到達40.2%（平成30年時点）を、小学校学習時間の追加やAI活用による効果を期待しても、学習対象者全員が海外大学への留学や企業が求める実務レベル（目安として最低B1と考える）への到達は難しいと考えます。

理解を共有するために、個人情報の開示が難しい日本ではありますが、支部大会の場を借りて、個人情報開示に抵触しない範囲で、この10年の間の学校、企業、そして従来型の学習からICTを活用した最近の学びにおける成果や課題を「ACTFL 準拠の OPIc サービス提供」結果から概観し、これからのグローバル人材育成における言語学習のあり方を考える方向性を見

出したい。

少し乱暴な纏めではありますが、言語学習は従来型の大規模教室や大量評価は全体としての効果を見出すことが難しいので、小規模教室やICTを活用した個々人に寄り添ったり、個人が自ら考え選択する学習形態への変容により効果が見出しやすくなっているように感じます。

4. 4つの提言に対する今後の取り組み

事業開始以来10年近く経つが、コロナの3年間ICT活用への変容に時間を要し、活動実態としては充分とは言えない中、多くの科研³⁾で活用頂き、中でも継続活用頂いている以下2件は関連発表を含め今後の人材育成を考える上で示唆に富むものと考えます。

①指導者の再学習視点から：「オンライン英会話」を中心とした現職小学校教員研修におけるスピーキング能力と育成（渡慶次 正則：名桜大学）⁴⁾

②AI活用の言語学習の視点から：「ELSTVirtual Travel around the World」の開発、学習効果」（宍戸真：東京電機大学）⁵⁾

EdMedia+Innovate Learning2023 Best Paper 受賞

残念ながら「英語」以外の科研活用やICTツール活用事例は乏しいものの生成AIの進展と活用により、研究成果や課題の流用促進が進むものと期待しています。

ACTFLの特徴である「英語」を含む全ての外国語を同じプラットフォームで評価可能なことを活かし、OPIcでは既に7言語における活用・評価結果を得ることが出来ました。

まだまだ小さな取り組みではありますが、外国語＝英語の思考を改め、異なった外国語も含めた二刀流にグローバル人材の道を探すべく他学会での活動を以下のように紹介し意見交換を図りたい。

① LNBTIにおけるOPIc適用評価プロジェクト

進捗状況のご紹介（日本語教育学会）

② 高校生で英語以外の外国語を学ぶ学生のOPIc独語体験（一般社団法人日本外国語教育推進機構<JACTFL>）

纏めとして、注意深く考えたいのが、ギャレット・ジョーンズが、その著書⁶⁾で述べている次の2つの多様性についてです。

- ① スキルの多様性（国の繁栄にとって良いもの）
- ② 文化的価値の多様性と結びついた民族的多様性（破壊的な社会的対立のより高いリスク）

後者のリスクを回避する要素の1つとして「言語」があり、より良く結びつけるには「会話」を軸とした相互理解が必要だと考えます。

日本人の英語能力にも課題が多いですが、外国人を労働力として迎え入れる基準やその後の社会との「つながり」形成にも課題が多いと思います。例えば新聞紙上等で目にする特定技能ビザでは「日本語能力試験(JLPT)」のN4合格を目安としていますが、JLPTの実施機関である国際交流基金が公開を始めたCEFRとの関係付け⁷⁾では概ねA2レベルと読み替えられます。又、日本人の英語A2レベル相当者を考えれば理解し易いと思いますが、社会生活を営むには難しい会話能力と理解して、「寄り添いを意識して行う」或いは「言語能力向上を働きかける」ことにより結びつきを考える必要があると思いますが、残念ながら一時的補完労働力とみなし、努力を諦めている傾向が強いように感じます。

法人活動からの情報提供をさせて頂きましたが、整理されたコンセプトとして「3領域×3能力+3連繫」^{7)p19}の考えと、掲載された書籍「外国語学習のめやす」⁸⁾を紹介させて頂くので参考に願いたい。

注

- [1] The American Council on the Teaching of Foreign Languages (全米外国語教育協会)の略称で、外国語教育に携わっている人々約1万3千人が会員登録する学会
- [2] 「移民は世界をどう変えてきたか 文化移植の経済学」（ギャレット・ジョーンズ 著、飯嶋 貴子 訳）

引用・参考文献

- 1) <https://global8.or.jp/JAGCE12.pdf>
- 2) https://www.mext.go.jp/content/20241225-mxt_soseisk01-000039447-03.pdf
(2024年12月25日参照)
- 3) <https://www.global8.or.jp/posts/academic1.html>
- 4) https://global8.or.jp/JASTEC_No.42.pdf
- 5) <https://global8.or.jp/EdMedia+Innovate%20Learning.pdf>
- 6) https://www.jlpt.jp/about/cefr_reference.html
- 7) https://www.tjf.or.jp/meyasu/common_pr/02meyasu2012_final.pdf
- 8) <https://www.tjf.or.jp/meyasu/>